

●5月の連休の合間に訪ねた畑では、ピンと葉が立ったタマネギの苗が次々と植え付けられていました。



●農業改良普及センターの農業塾に参加したことで、ほかの作物にも興味が出たという智子さん。「今年は農家の女性たちと協力してカボチャを作り、地元のレストランに卸す予定」と楽しそうに教えてくれました。



●「農作業が一段落する秋が一番好き」と意見が一致。笑顔が素敵な田井さん夫婦。

明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々があります。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●恵まれた自然条件を活かし堅実な営農に取り組み

タマネギ生産量日本一という ブランドの強みとプライド。 高い品質を守りながら、 持続可能な農業経営を図る。

〔北見市〕
田井和重さん



●「特別なことはしていない」と田井さんは笑いますが、試験品種の栽培を依頼されるなど、タマネギの栽培技術が高い評価を受けています。



●定植の後は苗の抜けている部分を補う補植作業を行います。歩きながら一つ一つ手作業で植え付けていきます。

家族の後押しを受けて 農家の3代目を継承

タマネギの生産量日本一を誇る道東の北見市。日照時間の長さや大小の川が流れる肥沃な土地など、タマネギ栽培に適した条件に恵まれ、その収穫量は日本全体の20%強にも達します。

北見市郊外の上とろ地区にある田井和重さんのタマネギ畑を訪ねたのは5月の初め。苗の植え付け作業の最盛期を迎え、広大な畑では移植機が休むことなく作業を続けていました。作業は4月下旬に始まり、5月上旬には終わってしまうため、この時期はまさに時間との闘い。奥様の智子さんがトラックでハウスから次々と苗を運び、それを田井さんが移植機に供

給するという鮮やかな連携で、作業はスピードに進んでいきました。

田井さんは、大学で経営学を学んだ後、「家業に関係する仕事を」と株式会社サングリン太陽園に就職。旭川センターの営業担当として活躍していた30歳の時に転職が訪れました。「父親が体調を崩したのをきっかけに、農家を継ぐことを考え始めました。もともと農業は好きでしたし、妻も『いいよ』と後押ししてくれました。子どもの頃はよく親の手伝いをしていたので、農作業にもすんなりなじめましたね」。

こうして田井さんは祖父の代から続くタマネギ農家を継承。まったく農業経験がなかった智子さんも、今では頼もしい存在として田井さんを支えています。

消費者ニーズに応える 生産体制と品質維持の工夫

北見エリアにおけるタマネギ栽培の特徴の一つが、長期出荷を可能にする生産システムです。極早生・早生・中晩生と、収穫期や貯蔵性の異なる品種を栽培することで、夏から翌年の春頃まで、市場に供給できるようにしています。

田井さんは極早生の「早次郎」、早生の「バレットベア」、中晩生の「北もみじ2000」など5品種を栽培。収穫は7月下旬に始まり、10月初旬まで続きます。タマネギの収穫が一段落してホッとすたのもつかの間、11月には育苗のためのハウスがけを行い、雪下ろしをしながら2月の播種作業を迎えるというサイクルで1年

が過ぎていきます。

昨年までJAきたみらしいの役員を務めていた田井さんは、道外でPR活動をした際、北見産タマネギのブランド力の強みを知ると同時に、品質に対する期待の高さも感じたと言います。「消費者からは味の良さはもちろん、見た目の良さも求められます。各農家で収穫した時点で行う選別と、共同選果場での厳密な規格分けの二重チェック体制で、北見産タマネギの品質を守っています」。

智子さんは、東京の友人にタマネギを送ったところ「みずみずしくて、とてもおいしい」と喜ばれた経験があるそうです。「何かを育てるという意味では、野菜も生き物と同じ。ちゃんと手をかけてやらないとうまく育たない。苦労もありますが、たくさん人の食卓に上るものを作るという楽しさを感じています」。

太陽と水の恩恵を受けて 長く続けられる農業を

現在、田井さんがタマネギを栽培する畑の総面積は8ヘクタール。ほかに、麦ともち米を栽培しています。田井さんが実家に戻ってから徐々にタマネギの作付面積を増やしてきましたが、大幅な規模の拡大はめざしていないと言います。

「若い頃はどんどん増やしたいと思っていました。でもふと、自分たちだけになったとき、経営が続けられるのだろうか、と考えたのです。今は親と一緒に農作業をしています。子どもたちもいますが、継いでもら



●かつてはサングリン太陽園に勤務していた田井さん。その時に身に付けた農業の知識などは、今でも役に立っているそうです。